大磯町新たな観光の核づくり認定事業

“三つの舞台を中心にニューツーリズムによる日本一の保養地再生”

東海大学観光学部連携事業
地域資源調査報告書

～ニューツーリズムの検討と創出～

TOKAI UNIVERSITY

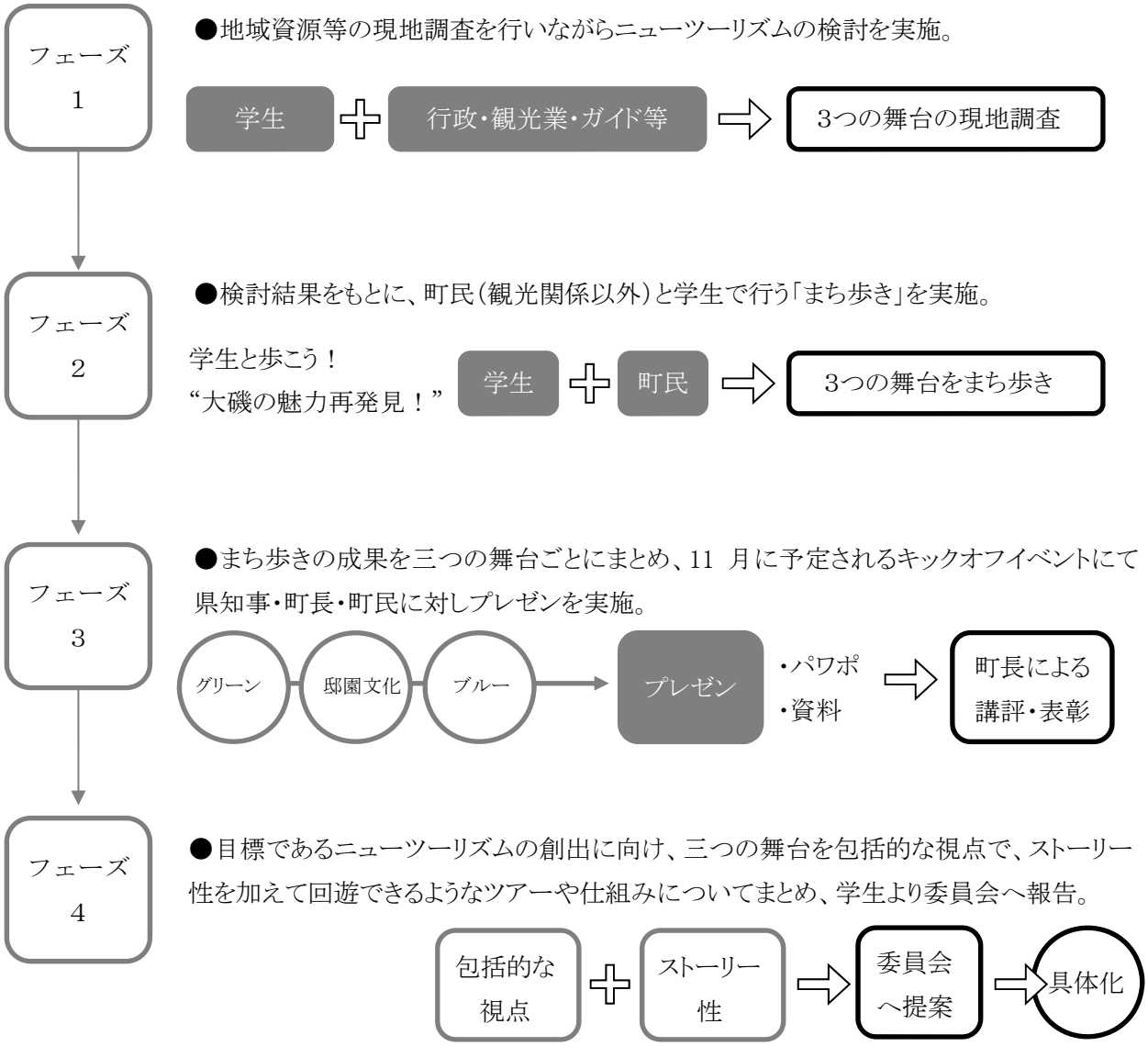
もくじ

1. 地域資源調査について..... 01
2. 地域資源調査の流れ 01
3. フェーズ１【地域資源等の現地調査】 02
3-1）目的 02
3-2）日時 02
3-3）当日の流れ 02
3-4）場所 02
3-5）参加者 02
3-6）こゆるぎの浜コース（ブルーパーク） 02
3-7）邸園文化交流園コース（邸園文化＋地域活動オープンガーデン） 03
3-8）大磯丘陵（グリーンパーク）..... 04
3-9）意見交換の風景..... 06
4. フェーズ２【町民と学生によるまち歩きによる地域資源等の検証】..... 07
4-1）目的 07
4-2）日時 07
4-3）当日の流れ 07
4-4）場所 07
4-5）参加者 07
4-6）こゆるぎの浜コース（ブルーパーク） 07
4-7）邸園文化交流園コース（邸園文化＋地域活動オープンガーデン） 08
4-8）大磯丘陵（グリーンパーク）..... 09
4-9）まち歩きによる地域資源等の検証 10
5. フェーズ３「大磯・秋のミナト祭り」ミニフォーラム（概要報告） 11
5-1）目的 11
5-2）日時・参加者 11
5-3）「こゆるぎの浜（ブルーパーク）」をテーマにした魅力提案..... 11
5-4）「邸園文化交流園」をテーマにした魅力提案 13
5-5）「大磯丘陵（グリーンパーク）」をテーマにした魅力提案 14
6. フェーズ４「ニューツーリズム創出に向けた提案」 17
6-1）目的 17
6-2）３つのゾーンのコンセプト・提案内容の確認..... 17
6-3）大磯町の目指す日本一の保養地のコンセプト物語づくり..... 18
6-4）日本一の保養地づくりに向けての具体的提案..... 19

1. 地域資源調査について

平成 25 年度の大磯町新たな観光の核づくり認定事業の計画を踏まえ、ニューツーリズムの検討と創出のための地域資源調査として、4 つのフェーズにわけて事業を実施した。まず、地域資源等の現地調査を行いながらニューツーリズムの検討を行った（フェーズ 1)。次に、検討結果をもとに、町民と学生で行う「まち歩き」の計画・実施を行った（フェーズ 2)。そして、その成果を三つの舞台ごとにまとめ、11 月に開催されたキックオフイベント「大磯 秋のミナト祭り」ミニフォーラムにて中間報告を行った（フェーズ 3)。最後に、目標であるニューツーリズムの創出に向け、三つの舞台を包括的な視点で、ストーリー性を加えて回遊できるようなツアーや仕組みについてまとめ、学生より協議会へ報告を行う（フェーズ 4)。このような 4 つのフェーズにわけて、段階的かつ実践的な事業連携を行ってきた。

2. 地域資源調査の流れ



3. フェーズ１【地域資源等の現地調査】

3-1）目的

地域資源等の現地調査を行いながら、ニューツーリズムの検討を行う。

3-2）日時

平成 25 年 9 月 29 日（日）　午前 9 時 30 分～午後 17 時 00 分

3-3）当日の流れ

9 時 30 分　大磯駅（菅井先生）、二宮駅集合（遠藤先生）

↓

5 つのグループに分かれ、それぞれの舞台における調査を実施する。
（昼食休憩等を含む。）

↓

16 時 00 分　大磯町役場　4 階第 1 会議室にて、意見交換会（1H）

3-4）場所：大磯町の区域を３つに分け、それぞれの舞台において調査を行った。

- こゆるぎの浜（ブルーパーク）
- 邸園文化交流園（邸園文化＋地域活動オープンガーデン）
- 大磯丘陵（グリーンパーク）

3-5）参加者：

NPO 法人	大磯ガイドボランティア協会	5 名
東海大学	観光学部　菅井先生、遠藤先生	2 名
	観光学部学生	16 名
大磯町	建設経済部　産業観光課	2 名
合	計	25 名

3-6）こゆるぎの浜コース（ブルーパーク）

＊ポイント

大磯港の総合活用方法及び北浜海岸の活用、港からの海、山の景観。

＊コース

大磯駅～大磯町役場～旧尾張徳川家邸跡地から自転車道へ～アオバト飛来地～松本順謝恩碑～濤龍館跡地～大磯港～北浜海岸～明治天皇観漁の碑～唐ヶ原～解散

その後、各人地図を見ながら町内散策～大磯町役場

＊ガイド担当

大磯ガイドボランティア協会（1 名）

＊参加学生

川野末紅，稲吉真以，鶴岡慎也（3 名）

＊調査風景

西湘バイパス沿いの海岸を歩く

たくさん落ちていた松ぼっくり

ハマヒルガオ用の柵

＊学生の意見

〇海の雰囲気がとてもよかった。海までの案内板がきたない。案内板を頼りにして歩けない。
〇海に入る手前の松の木の整備が出来ていない。雑草も多かった。
〇大磯の花である“はまひるがお”の保護柵が景観を崩している。
〇案内していただいたところが跡地ばかりで残念。説明がなければ通り過ぎているだろう。
〇俗化されていない自然は残っているが、人を集められる施設がない。
〇絵になる（自慢したくなる、facebook できるような）写真が撮れるような場所がなかった。
〇石碑があるだけで、海水浴場発祥の地らしい風景がなく印象に残らない。
〇たくさん松ぼっくりが落ちていたので加工してお土産にしたりできないだろうか。
〇海のきれいさとは対照的なバイパスの印象が強く残る。バイパス下を有効活用できないか。
〇照ヶ崎海岸は釣りスポットになっていてにぎわっていたが、港はお店も少なくさみしい。
〇飲食店が少なく、熱い日差しの中、休憩が思ったようにできなかった。

3-7）邸園文化交流園コース（邸園文化＋地域活動オープンガーデン）

A.駅東側のコース

＊ポイント

安田邸付近の景観、化粧坂付近の街道景観、長者林近郊の街並み中島邸近くのオープンガーデン参加宅の街並み、宿場。

＊コース

大磯駅～旧岩崎邸～大磯迎賓館～旧安田邸～化粧坂～善福寺～東町 3 丁目～後藤象二郎跡地～大磯カトリック教会～松林館跡地～下町旧道～延台寺～宿場町の跡地～大運寺～地福寺～新島襄終焉の地～鴫立庵～大磯町役場

＊ガイド担当

大磯ガイドボランティア協会（1 名）

＊東海大学

赤沼りか，倉持あやめ，宮越彩華（3 名）

B. 駅西側のコース

＊ポイント

大規模別荘地の元勲通り、松並木、城山公園

＊コース

大磯駅～藤村邸～翠渓薗～元勲通り～大磯こゆるぎ緑地～旧吉田邸～旧三井邸～馬場新勝寺～六所神社～バス～大磯町役場

＊ガイド担当

大磯ガイドボランティア協会（1 名）

＊東海大学

杉山愛純，上村結実，橋本由紀恵（3 名）

＊調査風景

ガイドの案内で路地を歩く

きれいだったオープンガーデン

中を見られない場所が目につく

＊学生の意見

〇オープンガーデンが魅力的だった。もっと活性化すればいい。

〇歴史的な資源がたくさんあるが、残念ながら、歴史を知らないとあまり興味がわかない。

〇事前に歴史的背景を学んでいれば、印象は違うのかもしれない。

〇資源がたくさんあるにも関わらず、公開されていないものが多く残念。

〇散策後に休める場所が少ない（コーヒーショップ等）。

〇トイレの数が少ない。

〇道標となる案内表示が見にくい。少ない。ボランティアの案内がないと回れなかっただろう。

〇地図を読む経験があまりないので直感的に回遊できないと不便さを感じる。

〇松並木の松が少なく物足りない。

〇鳥居の向きが不自然でどこから入ってよいかわからない（六所神社）。

〇移動は歩きだと体力的にきつかった、もっと自由に動けるインフラの整備が必要だ。

3-8）大磯丘陵（グリーンパーク）

A. 高麗山関連コース

＊ポイント

横穴墓、高麗山の歴史、湘南平・高田公園からの景観寺内邸以下はゾーンが異なりますが邸園コースで回れませんので追加。しっとりした街並み、趣ある小道、フラワーガーデン参加宅が多数ある街並み。

＊コース

大磯駅～隠亡道経由釜口古墳～高来神社～高麗山～八俵山～浅間山～湘南平～羽白山～高田公園～旧寺内正毅邸～旧安田靫彦邸～鎌倉古道～小学校～大磯町役場　　（食事は湘南平）

＊ガイド担当

大磯ガイドボランティア協会（1 名）

＊東海大学

勝俣友梨香，原口直也，長谷川綾子（3 名）

B. 国府地区コース

＊ポイント

虫窪地区の蜜柑、寺坂地区の大柿、西小磯谷戸の田園風景、のどかな山野の散策

＊コース

二宮駅～愛の地蔵尊（役場の車で送る）～黒岩～谷戸川沿いを下る～東の池～普門寺入口～岩田氏の柿農園付近～塔の下橋～鉄塔のある牧場～西小磯・寺坂線に入り西小磯谷戸を下る～城山公園～バスで大磯役場(このコースは距離と起伏があるので 4～5H ぐらいかかると思われる。)

トイレ：黒岩公民館、寺坂の憩の家のトイレ解放

＊ガイド担当

大磯ガイドボランティア協会（1 名）

＊東海大学

長谷川龍也，志賀　亘，高橋美波，飯塚綾乃（4 名）

＊調査風景

みかん畑と富士山を背景に

広大なみかん畑が広がる

風情のある田園風景

＊学生の意見

○とにかく良く歩いた。からだの悪いものが出て行ったすがすがしさを感じる。

○自然景観がそのまま残っている。空気、小川、みかん畑、栗、田園風情が印象だった。

○ハードな道だったが新しい発見や、移り変わる風情があって飽きなかった。

○出会う人々が温かく親切であった。ホスピタリティ豊かであった。

○ひとりで行ったら迷ってしまう。山道は印象として暗い。女子はひとりで歩けない。

○標識や地図がほとんどなく、あったとしてもボロボロで、ガイドがいないと歩けない。

○ビーニールハウスや田んぼが荒れ放題で、ゴミが散見された。残念な景色。

○休憩所、トイレが少なく休めない。

○交通機関の不便さ。移動が困難である。休日はバスが出ていない。

〇みかんや柿がたくさん実っていたが、食べられなかったのが残念。
〇長い距離を歩いて、遠くに青い海が見えた時は感動した。

3-9）意見交換の風景

調査後は町役場会議室に集合

調査の感想を述べる学生 1

調査の感想を述べる学生 2

4. フェーズ 2【町民と学生によるまち歩きによる地域資源等の検証】

4-1）目的：

地域資源等の現地調査検討結果をもとに、町民と学生で行う「まち歩き」を実施。

4-2）日時：

平成 25 年 10 月 13 日（日）　午前 9 時 30 分より 15 時 00 分まで

4-3）当日の流れ

9 時 30 分　大磯駅（菅井先生/岩田・宮﨑氏）、二宮駅集合（遠藤先生/由井氏）

↓

５つのチームにより、それぞれの舞台における調査を実施する。
（昼食休憩等を含む。）

14 時 00 分前後　各グループにて、解散。

4-4）場所：

大磯町の区域を 3 つに分け、それぞれの舞台において調査を実施。

- こゆるぎの浜（ブルーパーク）
- 邸園文化交流園（邸園文化＋地域活動ｵｰﾌﾟﾝｶﾞｰﾃﾞﾝ）
- 大磯丘陵（グリーンパーク）

4-5）参加者：

東海大学観光学部	菅井先生、遠藤先生	2 名
観光学部学生		22 名
まち歩き応募者		11 名
大磯町建設経済部産業観光課		3 名
合　計		38 名

4-6）こゆるぎの浜コース（ブルーパーク）：

＊ポイント

大磯港の総合活用方法及び北浜海岸の活用港からの海、山の景観。

＊コース

大磯駅～大磯町役場～旧尾張徳川家邸跡地から自転車道へ～ｱｵﾊﾞﾄ飛来地～　松本順謝恩碑～濤龍館跡地～大磯港～北浜海岸～明治天皇観漁の碑～唐ヶ原～解散

その後は各人地図を見ながら町内散策～大磯町役場

＊東海大学 A

川野末紅、鶴岡慎也、吉井梨華、岡崎寿々恵(4 名)

＊東海大学 B

橋本由紀恵、井口匠、永井宏美、上村結実(4 名)

＊まち歩き応募者

60 代女性（2 名）

＊まち歩きの風景

海岸の眺望

砂浜でレクリエーション

釣りでにぎわう大磯港

4-7）邸園文化交流園コース（邸園文化＋地域活動オープンガーデン）：

A.駅東側コース

＊ポイント

安田邸付近の景観、化粧坂付近の街道景観、長者林近郊の街並み中島邸近くのオープンガーデン参加宅の街並み、宿場。

＊コース

大磯駅～旧岩崎邸～大磯迎賓館～旧安田邸～化粧坂～善福寺～東町 3 丁目～後藤象二郎跡地～大磯カトリック教会～松林館跡地～下町旧道～延台寺～宿場町の跡地～大運寺～地福寺～新島襄終焉の地～鴫立庵～大磯町役場

＊東海大学

倉持あやめ，宮越彩華、綾部遥奈、前川翔　(4 名)

＊まち歩き応募者

20 代男性（2 名）

B.駅西側コース

＊ポイント

大規模別荘地の元勲通り、松並木、城山公園

＊コース

大磯駅～藤村邸～翠渓薗～元勲通り～大磯こゆるぎ緑地～旧吉田邸～旧三井邸～馬場新勝寺～六所神社～バス～大磯町役場

＊東海大学

杉山愛純，上村結実、佐藤健太　(3 名)

＊まち歩き応募者

60 代男性 1 名、60 代女性 2 名（3 名）

＊まち歩き風景

旧吉田邸

西園寺公望邸跡・旧池田成彬邸

藤村邸

4-8）大磯丘陵（グリーンパーク）：

A. 高麗山関連コース

＊ポイント

横穴墓、高麗山の歴史、湘南平・高田公園からの景観寺内邸以下はゾーンが異なりますが邸園コースで回れませんので追加。しっとりした街並み、趣ある小道、フラワーガーデン参加宅が多数ある街並み。

＊コース

大磯駅～隠亡道経由釜口古墳～高来神社～高麗山～八俵山～浅間山～湘南平～羽白山～高田公園～旧寺内正毅邸～旧安田靫彦邸～鎌倉古道～小学校～大磯町役場

＊東海大学

勝俣友梨香，原口直也，高谷美森、武田絵里奈　（4 名）

＊まち歩き応募者

60 代男性 1 名、20 代男性 1 名（2 名）

B. 国府地区コース

＊ポイント

虫窪地区の蜜柑、寺坂地区の大柿、西小磯谷戸の田園風景、のどかな山野の散策

＊コース

二宮駅～（役場の車）愛の地蔵尊～黒岩～鷹取山～城山公園

トイレ：途中で出会った親切な住民のお宅のトイレを拝借

＊東海大学

志茂　亘，高橋美波、大塚清尚(3 名)

＊まち歩き応募者

20 代男性（2 名）

＊まち歩き風景

農家の即売所での交流

鷹取山の頂上でランチ

湘南平の絶景

4-9）まち歩きによる地域資源等の検証

①フェーズ１・２を通じて得た、感じた、発見した大磯の観光資源、観光素材（今後観光資源になりそうなもの）、をハード・ソフト両面から抽出。

〇ブルーパーク

せっかくの素材が放置されてしまっている。大磯の海は静かで、落ち着く。実際に、調査後の３時間を浜辺で過ごした。子どもを連れて行きやすい雰囲気。犬もＯＫで、いろいろな趣味を楽しんでいる人がいたことから、プライベート感があった。

〇邸園文化

調査中に町民の皆さんがとてもフレンドリーでうれしかった。町全体として歴史のある雰囲気は醸し出されていたが、楽しめるかというとそうでもない。オープンガーデンや洋風の建物は学生目線で見てもとてもきれいで印象に残った。

〇グリーンパーク

山と海が近くにあることは強みである。トイレや看板さえ整備されれば手軽に登れる距離で誰もが楽しめそう。みかん、柿、栗等、6 次産業化できそうな資源がたくさんあった。

②観光資源・素材をさらに磨きあげる（価値を高める）ための課題を抽出。どうすればさらに輝くか？さらに価値を高めるには？何が必要で何がいらないか？

〇ブルーパーク

バイパスの印象が強いため、せっかくの落ち着いた雰囲気が損なわれている。道路の側面を白などの明るい色で塗り直す。または、植栽で目隠しできないか。防波堤にタイルを貼り、ベンチを置いて印象を変える。

〇邸園文化

旧安田邸は中を見ることができず、藤村邸は外観しか見ることができず、残念だった。若者は歴史をあまり知らないので、そういった層でも興味関心を持って歩くことができるような仕組みが必要である。歩いて回るには、学生の足でもちょっときつい。町内を自由に動ける交通インフラの整備が必要である。

〇グリーンパーク

看板がなく、一人では歩けない。あったとしても老朽化していたり、木の影に隠れてしまっていたり役割を果たせていなかった。同じく、ベンチとしての役割を果たせていないベンチが多く、休憩スペースはほとんどない。トイレもない。くもの巣が多く、草木の手入れがされておらず、雑然とした自然の印象。ゴミも多い。これらを解消できるしくみや取組みが必要となる。

③まとめ（共通認識として得たもの）

★ひとりひとりの住民の温かさにくらべ、トータルとして町全体としての来訪者を迎えるウェルカム（ホスピタリティ）が共通して不足している。

★大磯の良いところが、放置されてしまっていて、若い者に届く手法（雑誌，twitter，facebook）で情報発信されていない。

5. フェーズ 3「大磯・秋のミナト祭り」ミニフォーラム（概要報告）

5-1）目的：

キックオフイベントのミニフォーラムにて東海大学観光学部の学生による地域資源調査の結果を大磯の魅力創出の提案を発表した。

チラシ

5-2）日時・参加者：

平成 25 年 11 月 17 日（日）　午前 9 時 40 分より

学生 27 名、教員 2 名

5-3）「こゆるぎの浜（ブルーパーク）」をテーマにした魅力提案

＊担当者：川野未紅、吉井梨華

＊提案の要旨

①ホッと心休まる自然の空気感

大磯を訪れたのは今回がはじめてだったが、他の海では感じられない心の休まる自然の空気感を感じた。これが大磯のブルーパークの最大のポイントである。本当の自然を落ち着いた空気感で堪能できる。フリスビーをしたり、波を見ながらのんびりと談笑したり、落ち着いた自然の空気感に触れることで笑顔があふれる場所であった。

②湘南発祥の地、俗化されていない魅力

この空気感が生まれる理由を考えてみると、湘南発祥地だからこそ、俗化されていない魅力があると考えた。探れば探るほど、歴史深い土地だということがわかり、アピールが足りないと思うほど魅力あふれる町だということを知った。天気の良い日は世界遺産に登録された富士山が見え、休日は釣りをする人でにぎわっていた。

③まち歩き調査で気づいたこと

「はまひるがお」は、花がないときはまだらに見え、保護するための柵も、何の柵かわからず、違和感があった。さらに、自然とのギャップを感じる景色として、現実に引き戻されるような圧倒的なバイパス道路、コンクリートがむき出しの防波堤があげられる。自然と相反する色が景観をさみしくしていた。近くには雑草が生い茂り、自然の良さが生きていないところが見受けられた。「大磯へようこそ」という感覚が伝わらないといけないと思った。

④本当の湘南を独り占め“プライベートビーチ大作戦”

「本当の湘南の魅力を独り占め」というテーマを掲げた。具体的には海水浴発祥の地の大磯の海の自然に何かをプラスして新たな価値を見出し、新たな保養地として創造していく「プライベートビーチ大作戦」である。初めて訪れた大磯で感じたのは落ち着いた空間、アットホームな雰囲気であった。江の島や茅ヶ崎とは違う、俗化されていない魅力を引き出していく。

⑤大磯を訪問する意味を与える空間づくり

自然をもっと引き出すために、景観を損ねていた部分を改善する。目の前にあるバイパスを雲の白、空・海の青、緑の多い自然の多い色に塗り替え、はまひるがおの柵を撤去し、自然と人々が触れ合う空間をつくる。そして、バイパス下のエリアを有効に活用し来訪者の多様なニーズに応えられるようにすることで、大磯に訪問する意味を持ってもらえるような空間づくりを提案する。

この空間では、こんな独り占めができる。例えば、「食」としてバーベキューができたり、「遊」としてサッカー・釣り・フリスビーができたり、「休」として太陽・海風を浴びてからだを休めたり。大磯を訪れる目的は来た人に決めてもらうのだ。

のんびりすることだけが保養地ではない。来訪者のニーズに応え、プライベートビーチのような空間、何度も足を運びたくなる空間、これが平成の保養地ではないだろうか。大磯は明治時代にできた日本で最初の海水浴場。そして今、新しい平成の保養地を発信するのも大磯ではないだろうか。

⑥黒岩知事、船越大使、細田副学長からの講評（要旨）

「プライベートビーチ大作戦」というのは良い名称。景観を再生・活用していこうという点は良い。名称は面白そうだが、内容はそれほどでもない。日帰りなのか泊まるのか、どんな空気感の中でどの程度滞在するのか、ターゲットはどこに絞っているのか、もっと色々具体的に提案できたのではないか。学生らしい発表で好感は持てたが、まち歩きの時にもっと色々発見して欲しかった。松本順氏がこの地を保養地として始めた時は宿泊施設や療養所も一緒につくった。実現性や具体性を持ったアイデアを膨らませて欲しかった。

5-4)「邸園文化交流園」をテーマにした魅力提案

＊担当者：佐藤健太、倉持あやめ

＊提案の要旨

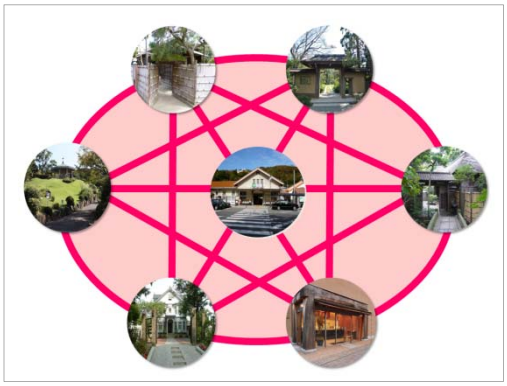
①歴史的観光資源とオープンガーデンに注目

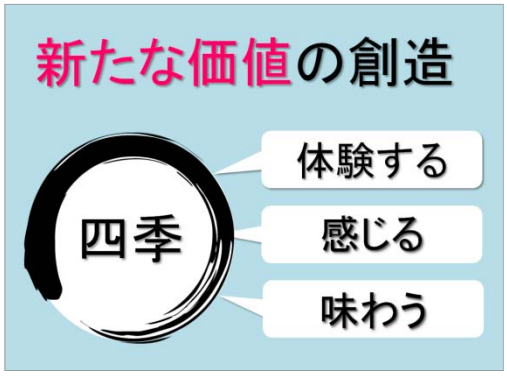
私たちは大磯に足を運んで「歴史的観光資源」と「オープンガーデン」に注目した。大磯は、歴史に身を置き、歴史を学び、歴史を再認識できる、貴重な歴史的観光資源が多く存在する。多くの邸園・跡地があることにより、身近に落ち着いた雰囲気で歴史を感じることができる。そして、4～5 月に開催されるオープンガーデン。一番きれいな様子を見ることはできなかったが、綺麗で色鮮やか町並みを感じとることができた。

②利活用に課題あり「点を線に、線を動きに」

しかし、この 2 つは利活用に課題があった。開放されていない資源が多く、保存も不十分なまま放置されている。オープンガーデンは、参加する家が少なく全世帯の 1 %未満である。この状態では、期待を抱いて大磯を訪れた観光客をおもてなしすることができない。これらを改善するコンセプトとして考えたのが「点を線に、線を動きに」である。観光資源が点で、この点の良さが生きるように線をつなげ、さらにその線が動きになるようにしていくのだ。

③明治と平成のコラボレーション





そのためには、今ある観光資源と新たな大磯ならではの価値をつくることが重要である。明治の歴史的邸園の庭（歴史的観光資源）と、平成の現代的な町民らしい庭（オープンガーデン）の融合。つまり、明治と平成のコラボレーションが必要だと考えた。

点を線に、線を動きに。私たちが 2 回の現地調査で見つけたのは交通インフラが圧倒的に少ないということだ。例えば、バスやレンタサイクルを増やすことができれば、レンタカーよりも、排気ガスで環境を壊さないし、地域住民への危険をなくすという点でも現実的である。健康的な保養地というイメージにもぴったりだ。

大磯の魅力を線としてつなげるために必要なキーワード。それが「四季」である。四季で新たな価値を創造するのだ。大磯は、四季を肌で体感し味わうことのできる資源を持っている。春には、町民の手で現代の邸園と歴史的邸園を花で飾る。夏には雄大な星空の光を、秋には

自然が生み出す紅葉や食を。冬には、町民の家をカラフルなイルミネーションで彩る。豊富な資源を線で結び、そこに新しい動きを加える、大磯を日本最大の保養地とするよう変えていく。

④黒岩知事、船越大使、細田副学長からの講評（要旨）

邸園を中心に明治と平成を結びつけるという斬新なアイデア。四季という美しさを感じられる。食・癒しなど魅力的なテーマになっていた。自転車のアクセスの提案は、エコロジカルで良いが、例えば、足の不自由な方など自転車に乗れない方に対する配慮もあると良かった。確かに有効活用されていない庭園、建物がたくさんあるのだろうなと改めて認識させられた。どのように有効活用してゆくかという点について、もう少し具体的な提案が欲しかった。点と線を繋いでそこに動きを作ると言えば、軽井沢のようにモデルとなる場所もある。マップを作り、自転車ならこういう経路、車ならこういう経路と色々な交通アクセスを提案している。日本最大の保養地が、どんなふうに日本最大かという点において、ピンと来なかった。四季それぞれの色合いがあるというのは今でもある。それをどうやって見せていくかが問題。自転車とは全然違った移動手段で学生らしい斬新なアイデアが欲しかった。

5-5)「大磯丘陵（グリーンパーク）」をテーマにした魅力提案

＊担当者：志茂　亘、勝俣友梨香，長谷川綾子

＊提案の要旨：

①大磯の山の恵み

まち歩きをして感じた大磯の魅力に、みかん・栗・柿など山の恵みがたくさんあることが挙げられる。道沿いに咲く花々もとても綺麗でポストカードのような花も咲いていた。大磯は「海」のイメージが強いが、まち歩きをしてみると、果物や花、植物など山の魅力もたくさん発見できた。これは、私たちにとって新たな発見だったし、大磯の魅力だと言えるだろう。

②最大の魅力、それは人の温かさ

私たちが感じたグリーンパーク最大の魅力、それは町の皆様の温かさである。まち町歩きをしていて、見ず知らずの私たちにみかんをくれた人や、道が分からなかったら丁寧に道を教えてくれた人、山登りをする前に自分の家のトイレを使わせてくれた人。町民の皆さんは心温かく、ホスピタリティの高さに驚き、感動した。都会では感じられないすばらしい景色に加えたホッできる魅力である。

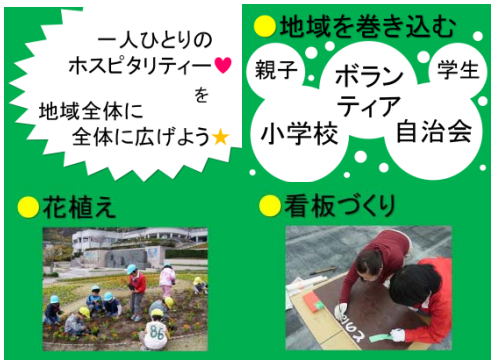
③ウェルカムを感じない残念な景色

その一方で残念な発見もあった。たくさんの蜘蛛の巣、道端のゴミが目につき、まち歩きの途中で思わずゴミ拾いをする場面もあった。使えなくなった自動販売機やボロボロの柵も気になった。何より、看板が壊れていて、地図がわかりにくく、この土地を知らない観光客に対してとても不親切ではないかと感じた。極めつけはウェルカムを感じることができない手付かずの山道だ。整備がされてお

らず、観光の対象となるものの魅力も伝わらない。このような状態が普通になっているのではないだろうか。観光客の目からは、クモの巣や道端のゴミ、手付かずの山道や廃れた看板はマイナスイメージとして心に残り、歓迎されている気分にならない。素敵な自然に触れ合えると思い大磯を訪れた人はがっかりする。期待以上のものでないとリピーターを得ることは難しい。

④一人ひとりのホスピタリティを地域全体に拡大

せっかく人の温かさや風景があるのにもったいない。今あるものを生かして、もっとこの町を良くできないかと思い、「一人ひとりのホスピタリティを地域全体に広げて行こう」を提案する。ホスピタリティは、最近、話題となった「お・も・て・な・し」の気持ちを持っていること。その一人ひとりから感じたおもてなしの心を合わせて行けば、1 だったおもてなしの心が 10 にも 100 にも大きくなり、観光地全体へ拡がっていく。



⑤地域一人ひとりのホスピタリティを地域全体に--------

どうやって拡げるのか。それは、小学校や自治体、ボランティア、親子、学生といった“地域のグループ”でホスピタリティを高めていくのである。具体的には、ゴミを業者や行政に頼んで処理してもらうのでなく、地域の皆さんと観光客とが一緒になって清掃活動をして道を整えていく取り組みを進める。イベントにすると、観光客の増加につながっていく可能性もあるだろう。さらに、清掃して整えた道に花を植えるイベントを催すことで、より綺麗な道ができるし、愛着もわくのではないだろうか。それができたら、ハイキングコースを考案し、看板が壊れているところは、自分たちでつくることにより、温かみが感じられる雰囲気のコースづくりを行っていく。スタンプラリーも良いだろう。

私たちは、ゴミや壊れた看板を自ら変え、地域の力でホスピタリティの拡大を考えている。住民の皆さんの協力を得て、大磯らしさを発揮できるプランだと思っている。そして保養地、観光地として盛り上げて行きたい。

⑥黒岩知事、船越大使、細田副学長からの講評（要旨）

すばらしい発表だった。研究発表していくにはコンセプトが重要。まち歩きをして何を発見できるかが大事で、それをきちんと発見できていた。発見したものは「人のホスピタリティの良さ」。ここにはすごく大きなヒントが隠されているのではないか。大磯をもっとこうしていきたい、観光客を増やしていきたいという思いが皆さんの根っこある。これをワッと広げていく、もう一つ突っ込んだ提案あればさらに良かった。手付かずの自然を守りながら、その手付かずの自然の中で過ごす、それを提案していくというのは、矛盾の多いことで難しいが、それをより楽しんでもらえるための

具体的な提案が一つ欲しかった。おトイレをお借りするところからすごく面白かった。高知県には、おもてなし課が認可をしたおトイレがある。観光客が誰でも気持ちよく使えるというシールを貼っている。マイナスをプラスに変えていこうという発想に好感を持った。ゴミ拾いを子どもたちと一緒にやり、観光客も交えて道を綺麗にする。そのときに行政に頼らない。自分たちでやろうという気持ちがこれからの町づくり、地域を愛していくことにつながる。発表を大磯町の方々がどう受け止めたか。地元の人は毎日見ている光景だからわからない場合がある。はっと驚いたのではないか。すごく良いチャンス。行きたくなるためには外の目が必要。この発想が全ての原点。ここから始まったときに本当に魅力的な潜在力が生きてくる。

5-6）ミニフォーラムの風景

大勢の方が集まりました

発表の様子

発表前の緊張

町長から表彰していただきました

記念撮影

ご講評をいただいたゲストの方々

6. フェーズ 4「ニューツーリズム創出に向けた提案」

6-1）目的

目標であるニューツーリズムの創出に向け、三つの舞台を包括的な視点で、ストーリー性を加えて回遊できるようなツアーや仕組みについてまとめ、学生より委員会へ報告する。良いものがあれば具体化の検討を次年度以降に進めていく。

6-2）３つのゾーンのコンセプト（提案内容）の確認

〇こゆるぎの浜（ブルーパーク）

コンセプト：「本当の湘南の魅力を独り占め～プライベートビーチ大作戦～」

提案内容：海水浴場発祥の地「大磯」は、他の海では感じられない心の休まる自然の空気感が漂っていた。しかし現実に引き戻されるバイパス・防波堤・保護柵があり、自然の良さが生きていないところが見受けられた。バイパスの景観に手を入れ、下のエリアを有効に活用し、大磯に訪問する意味を持ってもらえるような自然を体感できるプライベートな空間をつくる。食べたり、遊んだり、休んだり‥多様な楽しみを提供できる新しい平成の保養地をつくる。

〇邸園文化交流園

コンセプト：「明治と平成のコラボレーション～点を線に、線を動きに～」

提案内容：大磯は、歴史に身を置き、歴史を学び、歴史を再認識できる、貴重な歴史的観光資源が多く存在する。さらに現代風なオープンガーデンもきれいだった。ところが、利活用に問題があり、せっかくの資源が点になってしまっている。この点の良さが生きるように線をつなげ、さらにその線が動きになるようにしていくのだ。レンタサイクルによるエコロジカルな移動手段を整備し、健康的な保養地のイメージをつくる。四季をキーワードにしながら、明治の歴史的邸園の庭（歴史的観光資源）と、平成の現代的な町民らしい庭（オープンガーデン）を融合させていく。

〇大磯丘陵（グリーンパーク）

コンセプト：「一人ひとりのホスピタリティを地域全体に広げて行こう」

提案内容：大磯は「海」のイメージが強いが、果物や花、植物など山の魅力もたくさん発見できた。とくに町民のホスピタリティに感動した。しかし、ウェルカムを感じられない景色（道中に散乱したゴミ、手付かずの状態の山道、ボロボロの看板等）がたくさんあった。これらを町民の力（地域、学校、親、ボランティア等）で自ら変え、清掃活動、花植え、看板づくりを行って、一人ひとりのすばらしいホスピタリティをつなげ、地域全体に広げていくプロジェクトである。

6-3）大磯町の目指す日本一の保養地のコンセプト物語づくり

保養地のイメージを学生で意見交換したところ、「温泉、自然、空気、休める、静か、ホッとする、景観、歴史、みやげ、温暖な気候‥」があがった。大磯に照らし合わせてみると、8割くらいの要素がマッチングした。つまり、今でも保養地としての素地があるということだ。

次に、“日本一”とはいったい何を指すのかということについて考えた。まち歩きを行い、3つのゾーンから共通抽出された最大のポイントは、「自然」「ひと」「歴史」の3つである。その中でも、とくに「ひと」の温かさが印象に残っている。これらを本当の意味で活かしていくことが日本一への道のりになるのではないだろうか。

また、いくつかの問題意識が芽生えた。それは、明治の政界財界のトップがこぞって大磯に居を構えたのは何故なのかということである。当時の政財界人にとって、国の行方を左右するような毎日の巨大なストレスを解放してくれたのが、ここ大磯だったのではないだろうか。人が温かく、自然があり、温暖な気候がある。その魅力がたくさんの偉人を癒してきたのであろう。大磯に脈々と培われてきたものが今でも残っていたということだ。現代では、一般人でも都市生活でのストレスにさらされて生きている。いじめ、孤独死、核家族、孤食、無縁社会、離職、パワハラ、セクハラ、精神障害等、多様なストレスを抱えて生きているはずだ。これらによって心が傷つき、疲れ果てた人々が、心身を休めるために大磯へ来る。そんな人々の受け皿のような保養地としてコンセプトを描いてみてはどうだろうか。

明治の人たちが愛した大磯を、平成でも新しい価値を付け加えながら創造するのだ。ストレスからの解放のニーズを多くの人々がもっているのであれば、大磯で癒してもらえたら良いのではないだろうか。「平成における日本一温かくて安らげる幸せな保養地」へ。住むひとも、訪れる人も、ほっとする。本当の自分、自然な自分を取り戻せる、ストレスを癒してくれる。俗化された観光地ではなく、ストレスフリーなまちである。

実現のために重要なことは、それを支える“大磯コミュニティ”をきちんと再生していくことなのではないだろうか。私たちを迎え入れてくれた、大磯の皆さんのホスピタリティにフォーカスし、そこからはじまる取り組みをまちづくりの柱にしていきたい。

３つのエリアでどのように地域住民を参画させていくか。これこそが議論の中心となるテーマである。挨拶をしよう、掃除をしよう、看板をつくろう、花を植えよう、トイレを貸し出そう‥、できることはたくさんある。大磯に来て、良さをしみじみ感じて、住みたいと思う人が増えるような、新たな観光の核づくりがキーポイントになる。

6-4）日本一の保養地づくりに向けてのニューツーリズム創出の具体的提案

○こゆるぎの浜（ブルーパーク）

ブルーパークはターゲットを日帰りと宿泊の二つに分けた。日帰りの場合はスポーツエリア、ファミリーエリア、プライベートエリアなどの様々なエリアを設け、さらにビーチサッカーコーナーや BBQ コーナーなどを作ることによって、各々のニーズに応えるプライベートビーチ空間を作り上げる。また、港にはマルシェのような開放的な市場を設け、釣った魚をその場でさばいて料理してくれる飲食店を増やすことで港を活性化させる。宿泊の場合は大磯プリンスホテルと東海大学付属病院とのコラボレーションによるヘルスツーリズムを計画する。大磯プリンスホテルで地産地消の食材を使った健康的な料理を食べ、健康セミナーなどの講習会に参加し、その後東海大学附属病院で人間ドックを行うという泊まりがけのセットである。このようにブルーパークは、「健康」・「食」・「スポーツ」というイメージづくりを目指してはどうか。

○邸園文化交流園

庭園文化交流圏は大磯の歴史を多くの人に知ってもらうために、サイクリングロードを整備し、テーマに沿って道に矢印や色を付けて区別することによって初めての人でも分かりやすく各テーマに沿った名所巡りができるコースを作る。さらに、随所に貸し借りを自由にできるレンタサイクル施設を作り、気軽にサイクリングを楽しめるようにする。自由に返却できる場所がゾーンごとにあれば更に便利だ。また、ただ名所巡りをするだけでなく、歴史に対する学びを促す目的で大磯検定を観光協会が実施することで「観光」と「学び」の融合の実現を目指す。さらにオープンガーデンとの連携で、大磯アフタヌンティーを実施してくつろぎの場を提供する（これにより、庭園文化交流圏には品の良いおしゃれな女性が多く訪れることが考えられる）。

○大磯丘陵（グリーンパーク）

グリーンパークは町をきれいにしながら住民同士が絆を深めコミュニティを築くために、地元住民による地区単位での地区の清掃・花植えなどのイベントを実施してもらう。これらを通じて、困ったときに助け合える、安心して住めるような顔の見えるつながりを広げて行きたい。さらに、大磯の未来を担うであろう地元小学生に大磯を理解してもらうため、小学校を巻き込んでいくことも重要だ。内容は、親子（または学生と）でまち歩きイベントを行い、子どもたちが自分の目で見て、何が必要なのかを考えるというものだ。そこから標識や看板を作って設置するムーブメントにつなげたい。そうする事で小さい頃から自分たちの町の歴史に触れる事ができ、自分たちの町を知ることにもつながる、歴史教育の一貫となる。実現に向けては、学校、PTA、教育委員会等との連携・協力を積極的に行っていく必要がある。

〇第３種旅行業登録

前頁の各種ニューツーリズムを具体的な旅行商品として企画、造成、販売するための主体的組織（例えば大磯町観光協会）を選定し、第３種旅行業登録（地域限定旅行業）を取得することにより、商業ベースのみでの旅行商品化ではない持続可能な着地型旅行商品の企画、造成、販売を可能とする仕組みを構築する。

〇日本一の保養地、それは日本一住みたい町。

大磯全体としては、地元の商店や民家などの連携による“大磯インフォメーションセンター”を随所に設置する。このインフォメーションセンターでは、誰でも気軽に大磯のことを聞けて、なおかつ地域の人と触れ合う機会作りになる。このようなインフォメーションセンターを作るためには、３つのエリアごとで、大磯のことを知りつくしている方が必要である。将来的には、住民ひとりひとりが、大磯のことを知り、愛着を持ち、ここに住んでいることを来訪者に自慢できるようになることが理想だ。“大磯インフォメーションセンター”の設置は、地元住民の大磯を知ろうという気持ちや地元愛、大磯町民としてのプライドの創出につながる。

大磯の最終的な目標である日本一の保養地は、「日本一住みたい町」を実現してこそ可能であると考えた。大磯に来ると安心して休めてホッとできる。そんな雰囲気を町中で演出するためには、「こんなところに住んでみたい」と思わせることができる土台が必要となる。それが“大磯コミュニティ”だ。歴史や自然を守るためには、人のつながりがしっかりとしていなければならない。困った時に助け合えるのも大磯コミュニティあってこそ。2 回のまち歩きを通じて感じた、人の温かさにフォーカスしていくことこそ、場当たり的ではない、本当の大磯の宝である。まず、大磯コミュニティをさらに活性化させながら大磯のことを多くの人々に知ってもらう（起)、来訪者がリピーターになる（承)、「訪れたい」から「住みたい」に変わる（転)、リピーターが移住しそれが口コミなどにより広まり「日本一住みたい町」というイメージが確立される（結)。この起承転結こそが、「日本一住みたい町」につながるのではないだろうか。私たちの提案は、この“起承転結”の“起”に過ぎない。この提案が、目標に向けて大磯を多くの人によく知ってもらい、日本一の保養地再生の一助となれば幸いである。

〇最後に

この度のフェーズ１～フェーズ４において大磯町の多くの方々のご協力をいただきました。フェーズ１における大磯ガイドボランティア協会の方々、フェーズ２におけるまち歩きに参加いただいた町民の方々、フェーズ３のキックオフイベントにおける大磯町長はじめ役場スタッフの方々、フェーズ１～フェーズ４を通じて事務局としてご協力いただきました大磯町産業観光課の方々に心より感謝申し上げます。本当にお世話になりましてありがとうございました。

東海大学観光学部連携事業地域資源調査報告書
～ニューツーリズムの検討と創出～

編集責任者　菅井 克行（東海大学観光学部教授）
遠藤 晃弘（東海大学観光学部専任講師）

参加学生　原口直也　倉持あやめ　岡崎寿々恵
西村早紀　綾部遙奈　勝俣友梨香
吉井梨華　長谷川綾子　橋本由紀恵
赤沼りか　高谷美森　前川翔
武田絵里奈　宮越彩華　井口匠
吉越理恵　鶴岡慎也　上村結実
黒木梨花　杉山愛純　長谷川龍也
飯塚綾乃　川野未紅　加嶋つぐみ
稲吉真以　志茂亘　高橋美波
水井宏美　宇田川愉唯　大塚清尚
佐藤健太　大西健太

発行日　2014 年 3 月